

S45 田口様からの投稿（第 2 章）

空手道部ニュース 2024 年 12 月 11 日号で、S45 田口栄夫様からの投稿をご紹介しましたが、第 2 章としてインド放浪の経験を投稿いただきましたのでご紹介いたします。

第二章 アフガニスタン

梗塞、コロナ、ワクチン後遺症と次々に襲いかかる。しかし、痛い思いをして漸く分かることがある。そのきっかけはインド放浪の経験だった。

時代背景

について。1970 年前後、ベトナム戦争をきっかけに世界は平和運動に酔っていた。一部ではマリファナを吸い、平和、愛、自由を謳う若い世捨て人が現れる一方で、反戦と市民正義を求める人々や、環境保護と原子力発電問題に没頭する若者たちが現れ、学生運動が勃発し、社会は混乱して多様化してしていった。

敗戦国は自信を失い、若い世代に指標を与えられず、彼らに好きなようにさせて寛容を良しとした。こうして社会的および文化的変革が巻き起こり、ドイツにおいては左傾化が続き、つい最近までその影響が半世紀にわたって続くのである。

その昔の又昔、

イスタンブールに向けて

友人と二人でインドへの旅を企てた。マルチパンで有名な中世の建物が残る町、リユーベックを出発し、まずはイスタンブールまで旅費節約のためヒッチハイクを試みる。当時、道路という道路は親指を立てて車を待つ若者たちでいっぱいだった。皆、次の町へと夢を抱いていた。女性一人旅もいた平和な時代。イスタンブールからは汽車賃が安いので、そこからインドまでは汽車で大冒険をしようと計画する。三日かけてようやくオーストリアのグラーツに着き、市の見物を終え、再び道端で親指を立てて次の車を待った。夕方近くになって、漸く古びたフォルクスワーゲンが止まってくれた。新車は絶対に止まらない。運転手が車窓から助けを求めるように話しかけてきたが、言葉が通じず、アルファベットも読めないようであった。ただ、目的地に着くまでの都市の名前は全て記憶していた。それを頼りにたどると、目的地はなんとアフガニスタンのカンダハールだった。

ここからイスタンブールまで更に 4 か国を通過して、およそ 2000km 走ればアジアがまっている。

アジア大陸に一歩足を踏み入れる

旅をするには足で動くのが一番。記憶に残るし異文化を肌で感じられる。無理としても、せいぜい車で動く程度が良い。汽車ぽっぽと飛行機は避ける、何のために異国で彷徨っているのか、というのが当時の信条である。

幸運であった。道案内の見返りとして食事代を持ってくれたし、夕飯にはよく鶏がでた。体力をつけていよいよイスタンブール、ボスポラス海峡を挟んで、「ブルーモスク」の尖塔と円形の屋

根が見えたときはその威容に圧倒され、体にジーンと何かが走り去った。

ようやく異国に着いた感じがする。ヨーロッパでは感じえない何かがある。それはインドについて更に強くなる。

トルコ、イランを経由してアフガニスタン

のカンダハールまではまだ 3500km ある。山岳地帯のトルコを超えれば平坦なイランが待っている。ヨーロッパはどこに行っても道端で遊ぶ子供の姿が見られない。トルコに足を踏み入れた途端子供の群れに囲まれる。なかには車に向かって石をなげつける子もいる。多分我々がこの地に現れた最初の異邦人かも、、、イランにつくと砂漠が待っている。砂漠といっても砂地ではない。大きな石が大地の上に転がっているなかをただ一本の道が通っているだけであった。途中で顔だけを出し、それ以外はすべて黒い布で覆われたご婦人方が便乗してくる。

レストランはなかなか見つからない。空腹と喉の渴きを我慢しているうちにそれらしき店が現れる。風が吹けば飛されそう。コカ・コーラとかビールなどは一切なし。平べったい手製の乾パンとお茶だけである。そのパンは焼いた羊肉を包んだだけで食べづらい。しかしあのこってりとした味が今は妙に懐かしい。

ある夕方、車を止めて小休止、

そこから少し離れた平坦地に、ターバンを頭に巻いた約 50 人のグループが正座をして夕日に向かって祈りをささげている。西のかなたにメッカがある。一人読経者がいて祈りを捧げる。そのメロディは素晴らしく、夕焼けに浮かんでいる砂漠に溶け込むようであった。これは絵になる。今も目に焼きついている。その近く少し隠れたところで、肩から緑色の大風呂敷をすっぽり被ってかがみこんでいる運転手がいる。どうも用を足しているらしい。はっとした。砂漠の夜は冷える。あの風呂敷は昨夜、車内に転がっていたものではないか、、、それを失敬して毛布代わりに使って眠りこけていた俺、俺、俺、、、

道端にも茶店にもトイレがない。途中で道端でしゃがみ込むしかない。大きな石に包まれた陰でひっそりと座り込んでいる時に目についた小石。長い年月を経て表面はすべすべしている。一瞬ひらめいた。これは砂漠の共有トイレットペーパーなのだと、、、

この 40 代の運転手は一日少なくとも 12 時間はハンドルにしがみついていた。刺繍された筒のような帽子をかぶっている、その助手は無帽で、二人は礼拝は全くしていない。彼らも異邦人だったかもしれない。帽子から察するに多分キリスト教を信じるアルメニア人ではないかと。素朴で義理堅く人なつっこい。

かれらの住む町、カンダハールでお別れになる。場所は大きな倉庫の前で、のぞいて見ると自動車部品が山のように積まれている。合点した。中古車をドイツから運んで修理し、それで商売をするのであろう。

生涯忘れられない八日間、大地と知り合いになった日々。トイレットペーパーが無くて、足が地についている限りは生活できる事を知った。必要あれば磨かれた小石が岩の陰であなたをひっそりと待っている。

※メールが文字化けするとの連絡を頂きましたので、PDF を添付します。

<OB・OG 会費納入のお願い>

OB・OG 会費は

一口 5,000 円。現役世代は 2 口以上をお願いします（現役世代の解釈は各自の判断による）。卒業後 5 年間の年会費は 3,000 円とする

- ・銀行振り込み 七十七銀行 船岡支店 普通 5467012 東北大学空手道部 OB 会
- ・郵便局振り込み ゆうちょ銀行 02210-3-108952 東北大学空手道部 OB 会

<東北大学空手道部 HP について>

<http://touhoku-karate.boy.jp/>

会員専用ページパスワード：tksince1956

<名簿管理担当より>

住所、メールアドレス等の変更の際にはご連絡ください。

東北大学空手道部 OB・OG 会 会長代行 小林秀行 080-5177-7790